

六月の詩

あじさいと銀の雨

中島 瑞穂

枕元の

カンヴァスの中には

いつも

銀色の雨が降っていた

羽虫たちが耳をすます

薬屋の娘

だった母と

少年飛行兵

だった父の物語

何も無い時代

本が読みたくて読みたくて

家にある葉の本でさえ

読み漁ったものよ

そんな時

復員してきたあの人が

お土産に本をくれるわけ

嬉しくってねえ

本にほだされて

一緒になつたようなもんよ

そこでいつものクスクス笑い

くりごと

むつごと

よしなしごと

花卉の数だけつぶやいて

母は少女に戻っていった

雨の中を歩くと

薄紫の明かりが

こっちこっちと

灯り始める